

## 第一章 大蓮寺の伝説

### 行基が東大寺・大仏造営の勸進で小庵を建てる

行基菩薩坐像  
(唐招提寺蔵・重要文化財)



浄土宗如意珠應山極楽院  
大蓮寺の縁起については明治維新の廃仏毀釈や明治 45 年 (1912) のミナミの大火、昭和 20 年 (1945) の大阪大空襲などで関係資料が失われ、残念ながら詳細はよくわかっていません。しかし今から約 100 年前に書かれた『大阪府全誌』(著者：井上正雄/

大正 11 年・1922 年発行) によると「聖武天皇の天平 15 年 (743) 閏 3 月、僧正・行基が諸国を行脚していた際に小庵を結んだ」ことが大蓮寺の始まりであると記述されています。

上記は『大阪府全誌』の著者・井上氏が当時の大蓮寺第 26 世住職の秋田貫融師に取材して書いた記事です。あくまで「寺伝」であって実際のことはよくわかりません。わかりませんが、少なくとも貫融師は「大蓮寺は行基ゆかりの寺院で大阪有数の古刹である」という矜持を持っていたことでしょう。

ちなみに天平 15 年 (743) に行基が諸国行脚をしたのは歴史的事実です。聖武天皇から奈良・東大寺大仏造営の詔が發布されたさいに行基は勸進役に起用され、それで諸国を巡っていました。行基やその弟子たちが浪華の地を訪れたことは確かにあったろうと思われます。

## 菅原道真が大宰府左遷の折に訪ねる



菅原道真像(菊池容斎『前賢故実』巻第五より)

が土師氏でした。

また菅原道真は藤原氏の讒言によって失脚し、明日をも知れぬ左遷の身となりましたが、朝廷に疎まれながらも民衆を教化しようと諸国を放浪したのが行基です。行基の小庵に足を運び、どこか自分の境遇と重ね合わせて気持ちを鼓舞するようなところがあったのかも知れません。

続いて『大阪府全誌』には延喜元年(901)、菅原道真が大宰府左遷のさいに行基ゆかりの小庵に立ち寄って名残を惜しみ、祈願を籠めたと書かれています。

なぜ菅原道真が行基ゆかりの小庵を訪れるのか?と疑問に思いますが、菅原道真の先祖は土師氏(野見宿禰→土師氏→菅原氏)で、その土師氏集団を率いていたのが行基でした。行基は庶民に仏教を広めるために溜池や架橋など社会福祉事業に邁進したことはよく知られていますが、そうしたさいの土木工事を担った豪族

## 足利将軍家の祈願所となる



足利義晴像(土佐光茂画、1550年)

行基ゆかり、菅原道真ゆかりの小庵はその後、鎌倉・南北朝・室町と武士勢力による戦乱の時代に突入すると、全く見る影もないほどに荒廃したといえます。それを嘆き悲しみ、復興を志したのが室町幕府 12 代将軍・足利義晴

(1511～1550) の三男・晴誉上人でした。

この晴誉上人が一体、どのような人物であったのか？詳細はわかりません。寛政年間(1789～1801)に江戸幕府が編修した大名や旗本の系図集『寛政重修諸家譜』にはその名前はないようです。

足利義晴の子には足利義輝(13代将軍)、覚慶(のちに還俗して足利義昭・15代将軍となります)、周髡などが記録されていますが、長子の義輝以外は皆、出家しています。足利将軍家は家督相続者以外の子は仏門に入ることになっていました。晴誉上人もそのような足利家の伝統的な慣例に従って仏門に入ったのだらうと思われます。

晴誉上人は自ら諸国を巡化して浄財を集め、また家祖・足利尊氏の追善供養も込めて天文19年(1550)3月5日、一大伽藍を創建しました。その境内は頗る広く東西5町、南北4町に及び、塔中8ヶ寺、直末175ヶ寺を有し、堂頭は雲に聳え、足利家の祈願所として近畿の名刹となったといえます。しかし戦国時代の動乱に巻き込まれ、兵火にかかって烏有に帰しました。

○應蓮社顯譽魯道泰純は大阪寶泉寺願譽の弟子にて  
生實に下り安譽上人の坐下に修學する事數年學解日  
々に長し同學ことく伏す後歸國し堺宗泉寺に住  
し文祿三年大阪備後町四丁目に建立す然るに近隣よ  
り地所をちぢめければ駿府へ下向し言上に及びけれ  
ば小出播磨守へ御書付下置れ韃町にて大屋敷を給へ  
り其後御上洛ましくければ御禮御目見あり其のち  
京淨福寺淨譽上人城トモ花頂山に昇轉の時德行純固たるに  
よりてかの寺の補處として第四世たり寛永九年八月  
十七日入寂

再度、寺院を復興したのが應蓮社顯譽魯道泰純(?~1632)です。『浄土宗全書』によると顯譽上人は当初、大阪・宝泉寺の願譽上人の弟子でした。その後、下総国(現・千葉市)生実(おゆみ)の大巖寺二世の虎角上人(1539~1593)の下で数年間、修学しました。その学識の深さは他の学徒がひれ伏すほどであったといえます。その後、帰国し、堺・宗泉寺に入りました。この宗泉寺は『堺

市史』によると訓蓮社願譽不捨順宏の開基とありますので、最初の師匠である願譽上人が堺に開基した寺を継いだのかも知れません。

その後、いよいよ文祿3年(1594)に大阪・備後町4丁目(現在の本願寺津村別院・北御堂の北側あたり)に足利家祈願所の大蓮寺を再興します。ところが、この寺の敷地が大蓮寺の寺格に対して小さすぎるということで、顯譽上人はなんと駿府まで赴き、徳川家康に直訴しました。



じつは徳川家は代々、熱心な浄土宗の信者でした。また家康が桶狭間の戦いで敗北したさいに逃げ込んだのが浄土宗寺院の大樹寺で、迫りくる織田勢を寺の門（かんぬき）で蹴散らしたのが七十人力の怪力僧・祖洞上人でした。まさに家康の命の恩人ですが、この祖洞上人の曾孫弟子（祖洞→貞把→虎角→顕誉）が顕誉上人となります。

家康は顕誉上人の直訴に対して感じ入るところがあったのか、書付を小出播磨守に送り、その結果、顕誉上人は慶長6年

（1601）に鞆町（天満？）にて大屋敷を給わったといひます。以上は『浄土宗全書』『大阪府全誌』『徳川実記』に記載されている大蓮寺の変遷です。これに対して『摂陽奇観』（浜松歌国著、天保4年・1833年刊行）では、最初は備後町ではなくて三津寺のあたりに寺院が復興され、その後、家康の命令で西横堀あたりに移されたとあります。場所に相違はありますが、家康の命令によって大蓮寺が移転したということは間違いのないようです。

また大阪の夏の陣後の元和年間（1615～1623）に現在の高津の地に移転したと『難波丸綱目』に記載されています。おそらく大阪夏の陣で大蓮寺もなにかしらの戦災を受け、戦後復興の一環で下寺町の整備が成され、幕府の命令で大蓮寺は現在地に移転したと推測できます。

その後、顕誉上人は京・浄福寺の法雲上人が知恩院第30世に昇転するさいに「徳行純固」たる僧侶として抜擢され、補佐として浄福寺の第4世住職となりました。この法雲上

人は元は今川氏で、家康が三河・法蔵寺にいた頃からの友人で、度々、家康に召されて思  
い出話に花を咲かせたといひます。従来、知恩院住持の進退は青蓮院門主の令旨によつて  
なされていましたが、法雲上人以後は、すべて將軍の台命によつて沙汰されることとなり、  
これは幕末まで継続されました。いわば江戸幕府による知恩院支配のような側面もあつた  
のですが、そこに顕誉上人も携わつていたこととなります。

ちなみに大蓮寺の塔頭寺院・應典院は大蓮寺3世住職・誓誉在慶の隠棲所として建てら  
れたものですが、それは『浄土宗寺院名鑑』では慶長10年(1605)、『大阪府全誌』など  
では慶長19年(1614)のことと記載されています。夏の陣前に建立されたことになりま  
すので、應典院も夏の陣後に大蓮寺と共に高津の現在地に移つたということになります。

### 家康の身代わりになつた大蓮寺の僧侶？

地名で云ふと高津二番町、最初に書いた高津郵便局の筋向に津の清といふ粟おこし屋が  
ある。其店先に井筒が二つ仲良く竝んで始終奇麗な水を吹きこぼしてゐる堀抜井戸がある  
これが二ツ井戸で、粟おこしが大阪名物であると同様、この井戸もまた大阪名物である。  
しかし粟おこしと井戸とは何の關係もない。

大阪陣の初、徳川家康が真田幸村に追ひ詰められて草叢の中に身を隠した。追ひ詰めて  
来た幸村は「狸親父の畜生、撃ち捕つてやるぞ」と火繩銃の台尻で、草の中を探したが、と  
う／＼見附からなかつた。ど向ふの草叢の陰にチラ／＼動くものがある。こんな所に居る  
ものは家康か野良犬に違ひないと思つたから、構はず一發ツツ放して、行つて見ると、家  
康でも野良犬でもなくつて、一人の僧侶だつた。其間に家康は草の中を掻分けて逃げおふ  
せてしまつた。

戦が済んで徳川の天下になると、家康は其當時の事を思出して、調べさせて見ると、そ  
の身代りに立つた坊さんは下寺町大蓮寺の和尚だといふことが判つた。そこで家康も大に  
氣の毒がつて、其代りに釣鐘を鑄て大蓮寺へ奉納することにした。その鐘を鑄るのに用ひ  
た井戸が二ツ井戸で、其鐘は今でも大蓮寺の鐘樓に釣られてゐる。そして高津四番町の通  
りからは眞正面に見へるので、この通りを鐘筋と稱へてゐる。

徳川家康と大蓮寺関連の伝説には  
以下のような面白い話も残されてい  
ます。大阪夏の陣のさいに真田幸村に  
追ひ詰められた家康が草むらの中に  
身を隠しました。幸村は火繩銃で草む  
らをかき分けて探しましたが、そのと  
き草むらの陰にちらちら動くものが  
ありました。幸村は家康だと思ひ込ん  
で撃ち込んでみると家康ではなくて  
一人の僧侶でした。僧侶は絶命しまし  
たが、そのあいだに家康は無事に逃げ  
出すことができました。

### 家康の身代りになつた大蓮寺僧侶の伝説

戦が終わつた後に家康が身代わりになつた僧侶は一体だれであつたのか？と調べると

大蓮寺の僧侶ということがわかりました。それで家康は僧侶の供養のために大蓮寺に釣鐘を奉納したというものです。その鐘を作るさいに用いられた水が二つ井戸であったといえます。

昭和2年(1927)に出た大阪趣味研究会による『大阪叢書』「鐘を吹いた二つ井戸」という記事で、もちろん史実だとは思えませんが、今の我々が想像する以上に、かつての大阪の人々には家康、江戸幕府と大蓮寺はさまざまな因縁があり、「徳川方のお寺」と目されていたのかも知れません。

### 大蓮寺の鐘は大阪市中最大の釣鐘だった

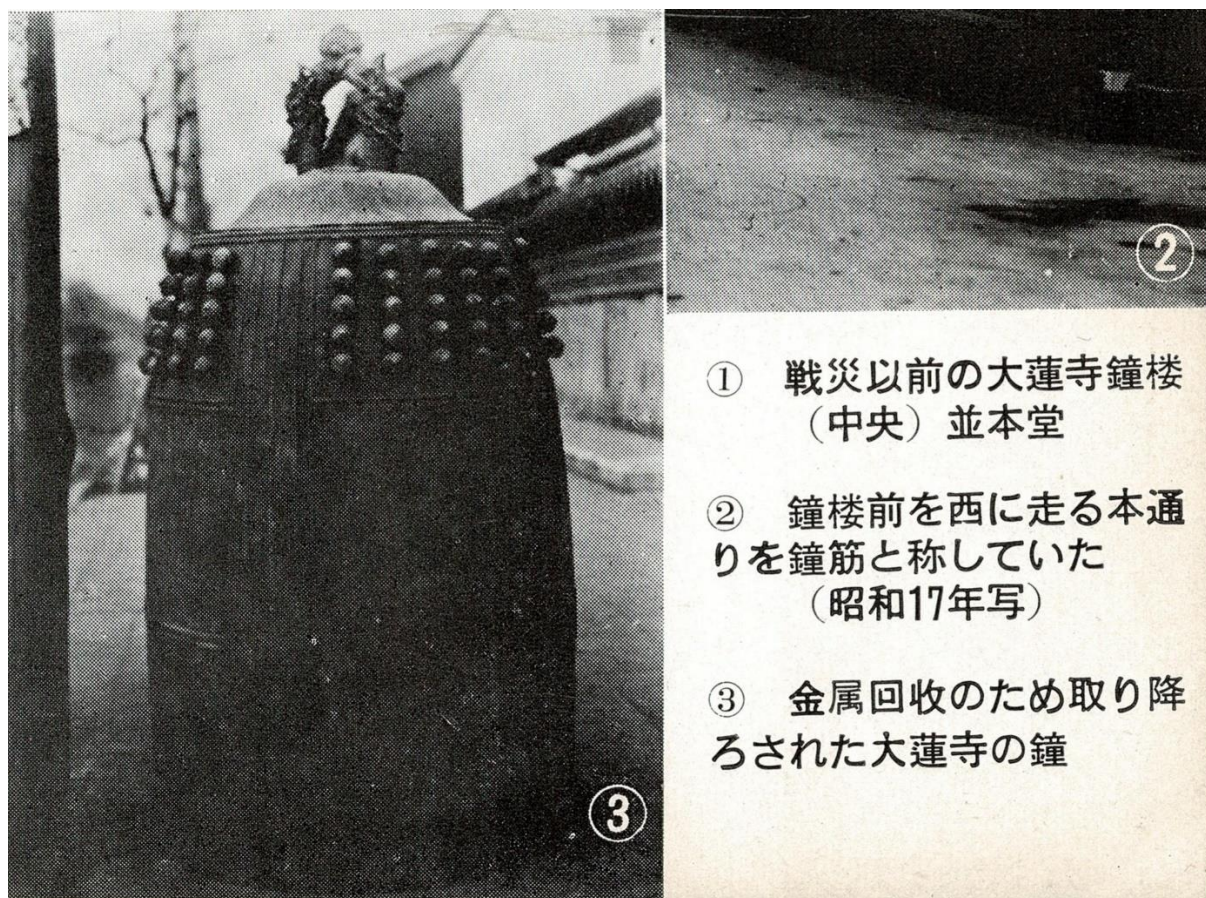


戦前の大蓮寺梵鐘

話が、大蓮寺の釣鐘伝説に及んだので、釣鐘の話にも触れておきます。『大阪金石史』(大正11年・1922年刊行)によると江戸時代、大阪市中最大の釣鐘は、この大蓮寺の釣鐘だったといえます。総高6尺8寸7分(約208センチ)で寛永19年(1642)に丸屋善太郎・丸屋五郎八(兄弟?)が父(名前不詳)の菩提のために寄進したものとされます。鐘には「摂州大坂如意山大蓮寺二世典譽信阿」上人の名前と冶鑄大工として「摂州大坂住人藤原朝臣高瀬吉左衛門尉正次」、丸屋一族58名の法名が刻まれていました。

江戸時代には大蓮寺といえば大釣鐘の寺と連想するほど有名であったようで、大蓮寺に通じる東西道（現在の大阪市立高津小学校の北側）は「釣鐘筋」（または鐘筋）と呼称されました。千日前や黒門市場方面から大蓮寺に至る参詣道として認識されていたようです。大阪ミナミ界隈の町衆は大蓮寺の釣鐘の音と同時に寝起きしたということでしょう。

のちに享保 18 年（1733）に高津新地ができたさいは、高津新地は幕府から茶屋 32 株、湯屋 2 株が許可され、その一角として釣鐘筋も遊所になりました。この遊所は明治時代に廃絶しますが、大正 13 年（1924）の『大阪独案内』には「十の日」には「高津釣鐘筋」に夜店が出たという記録などもあります。毎月 10 日、20 日、30 日ともなると釣鐘筋には夜店が出て、大蓮寺の門前市のような光景が展開していたようです。



この大釣鐘は残念ながら昭和 17 年（1942）に太平洋戦争の金属供出によって失われてしまいました。